優秀賞

殻を破る

山形大学附属中学校
一年　桑嶋　愛

応援団の学ラン姿に憧れていた。小学校高学年では運動会実行委員を務めたけれど、本当にやりたいのは、長いハチマキをまいて学ランを着る応援団の方だった。実行委員として開会の挨拶は一生懸命に考えて全校生の前で堂々と言えたけれど、勝者にしろ敗者にしろ最後に汗と涙にまみれている応援団の方が何倍もかっこいいと感じていた。

リレーの選手に選ばれるくらい足が速くて背がぐんと高くて、それが私自身心に抱いた応援団になれる条件だった。残念ながらふたつとも私は満たしていなかった。徒競走で一位に入れたことはない。リレーの選手に選ばれたことなどもちろんなかった。身長はずっと学年で前から一番か二番目だった。

中学校に進学したばかりの頃、担任の先生がおっしゃった。「一年を通して様々な行事があるので、全員一役を務めなければならない。自分は何がしたいか考えておくように。」その中に七月の運動会の応援団もあった。ああ、応援団になりたい。心の声が叫んでいる。

中学一年にもなれば、人はすべてが平等なんてことはあり得ないことくらいは、知っている。すらっとモデルのような体型の人もいれば、私のように小さくてころっとした体型の十二歳もいる。顔もさまざま、容姿、才能も、人それぞれ。風のように速く走れる人もいれば、苦手な人も。努力すればなんでも叶うなんて、百パーセント信じている中学生はもう少ないはずだ。自分の力だけでは変えられないこともあることを知り、叶えられない夢は諦め我慢しながら、折り合いをつけてみんな何とかやっているんだ。

それでも、やっぱり応援団になりたいんだ。おとなしくさせようとしたのに、また心の声が叫んだ。諦めなくてはいけない夢なのかな。

連休を過ぎると、班員同士が自由に意見や興味あることを書く班ノートが始まった。前の人の話題について続けて書いてから、後半私は「応援団になりたい。」と書いてしまった。空きスペースには学ラン着てハチマキ巻いてエールをきっている自画像のイラストまで描いて。約一週間後、班ノートが再び私に回ってきた。「愛ちゃんの応援団になりたいという希望、応援するよ。」WさんとSさんが書いてくれていた。

私には無理、これくらいしかできない、ふさわしくない。自分を縛り、自分の可能性を狭めていたのは、自分だ。応援団になるのに条件などない。やりたくて、一生懸命がんばれるか、それだけだ。殻を破れ。自分で作っていた殻を破れ。私は声が通る。かなり大きな声が出る。歌も結構うまい方。できる。やれる。やるぞ。

母に言うと最初ちょっと驚いたような顔をした。すぐに「いいね。顔見えないぞって言われたら、台の上に乗って頑張りなさい。」そう言ってにこっと笑った。

絶対応援団に立候補するぞ、心に決めてひと月経った頃、一つの問題が発生した。朝の通学バスでの出来事。毎朝一緒になる四人グループの上級生たちが、私の方を見てにやにや笑うのである。初めは自分の気にしすぎかと思ったが、数日同じことが続いた。そして、上級生たちの話し声が私の耳に届いた。「あの子、背低いね。スカートが床につきそう。ふふふ。」事実だけれど、ちょっと胸が苦しくなった。

ちょうど、毎年行われるアンケートが実施された。同級生のYさんも、同じ経験をしていたので、二人で相談してアンケートに書いた。「気分よく登校できるように解決しておいた方がいいね。」担任の先生がおっしゃった。「ところで君の名前を相手四人に伝えてもいいかい。」私が希望しないなら特定せずにやんわりと、上級生に注意を促すということだろう。「構いません。私の名前を出してください。」一週間後、上級生が一人ずつ私に謝罪するという。ちょっと緊張したけれど、まっすぐ相手の目を見て、自分の正直な気持ちを伝えようと決めていた。「背が低いのは事実です。でも繰り返し言われて苦しかったです。今日謝ってくれてすっきりしました。これからもバスで会うでしょうが、よろしくお願いします。」以前は怖いように思われた上級生は、とても優しかった。心から反省しているのが伝わってきた。今では校内やバスで声をかけてくれる。逃げなくて本当によかった。

七月、同級生の男子から借りた憧れの学ランを着て、私は声を張り上げて応援した。遠くでビデオを撮っていた母は、ズボンの丈が余っていてハラハラしたが、友達が数名さっと寄ってきて、裾をまくり上げてくれたのでホッとしたそうだ。私本人は、それさえ気づかないほどわくわくしていた。歌ったり、踊ったり、本当に楽しかった。応援団になりたかった私だが、殻を破る自信をくれたのはかけがえのない友達の応援だった。